

わたくしの

シルクロード ④



横張和子

絹の道

シリアのバルミユラは東西の交易路の要衝にあつて、その中継基地として活躍し、オリエント第一の富強な隊商都市として栄えました。その商人貴族の墓から出土した多量の絹織物の大部分は中国から遙々もたらされたものでありました。中国の絹はバルミユラを経てローマに入ったことが考えられます。

地中海の国々の人たちが、絹を知つたのは文献上ではアレクサンドロス大王（紀元前三五六―三三二）の前三三〇年より三三二一年にわたる東方遠征のときにさかのぼります。前三二七年その一武将のネアルコスがアフガニスタンからインダス川の上流、パンジャーブ地方に入ったとき、セリカという国から来たという軽くて柔かな織物を目撃したというのです。彼はこれをインドの産物で樹皮の一種から織つたものといいましたが、現在ではこれは中国の絹織物であつたらうといわれています。

ローマ帝国ではヴェスパシアヌス帝の時代（六九―七九）、大プリニウス（二三―七五）はセレスの絹を「羊毛のような彼らの森の産物」といい、ローマ人のある記録には「ローマ皇帝、執政、將軍の衣服は紫の絹地に金糸で刺繍したもの」であることが述べ

られていて、セレスの絹についての記載は少ないのです。東ローマ帝国の時代になると、ユスティニアヌス二世（五六五—五七八）の時代の歴史家メナンドロスは「ローマ人は絹をほかのどの民族よりもはるかに多く消費する」と述べています。

ローマ帝国が中国の絹を求める最も近い道はイラン高原を横切る陸路であったのですが、ここにはバルティア王国があり、地中海から東進を狙うローマ勢力と対立していました。バルティアは『後漢書』西域伝などに安息として知られています。安息とは王朝の名であるアルサケスからとったものといわれますが、それは前二五〇年ごろ、イラン高原の西北部の遊牧民から興り、イラン高原を占領し、当時、ここを支配していたギリシヤ人を圧倒して王国を建設し、ミトリダチス二世（前一二三—八七）の時にはその勢力は最も拡大し、エウフラテス川の流域にまで及びました。しかし後三世紀のはじめイラン高原の西南部のファルス地方より興ったササン朝、ペルシアに滅ぼされますが、その時代はちょうど中国の前漢と後漢の時代に相当します。後漢章帝の章和元年（紀元八七）に、安息は使節を漢の宮廷に送り獅子（ライオン）、符拔（キリンに似た無角の獣）を贈り、また永元十二年（一〇〇）には獅子と条支（シリア）の駝鳥とを獻じていますが、これはバルティアが中国の好感をかって、絹貿易で主導力を独占しようとした

からです。

『三国志』第三十魏略所引の大秦伝によると、「大秦）王が常に直接漢と通交しようとしたが、安息が漢の絹織物の通商を独り占めしようとしてその道をふせぎ、漢に到達することが出来なかつた」とみえています。大秦国とはローマ帝国のエジプトを指し、その首都である利韃はアレクサンドリアであることは確かで、それゆえローマ側はアレクサンドリアを起点とし、海路インドに通商の道を開拓するのです。折しもインド洋に六月から九月の間吹く南東の季節風「ヒッパロスの風」が発見されて、紅海の入口からインドの西南岸まで追風によって順調に航海ができるようになりました。それは一世紀の半ばごろアレクサンドリアで編纂された東方貿易の案内書「エリュトゥラ海案内記」（村川堅太郎訳生活社刊）によく示されています。

それによれば、インダス川の河口にある港バルバリコンからセレスの毛皮や綿布、生糸が、西北部の港バリュガザから絹布がローマ側に輸出されています。そしてその背後の内地にはガンダラーをはじめとさまざまな種族のいることが記されていますが、これによって、セレス（中国）の絹は中央アジアの道を西漸してそこから南下してインドの港にまで運ばれて来て、そこで船に積みかえられて、ローマへと送り出されたことが知られます。



▲ 図 版 ①

東方の絹織物、香料、瑇瑁たぎまなどに対して、ローマからはローマの銀貨やガラス器などが送られました。このローマとインドの通路は非常に繁昌し、それに伴ってガンダーラやバクトリアには経済的な繁栄がもたらされました。そこにあらわれたのがガンダーラ美術です。

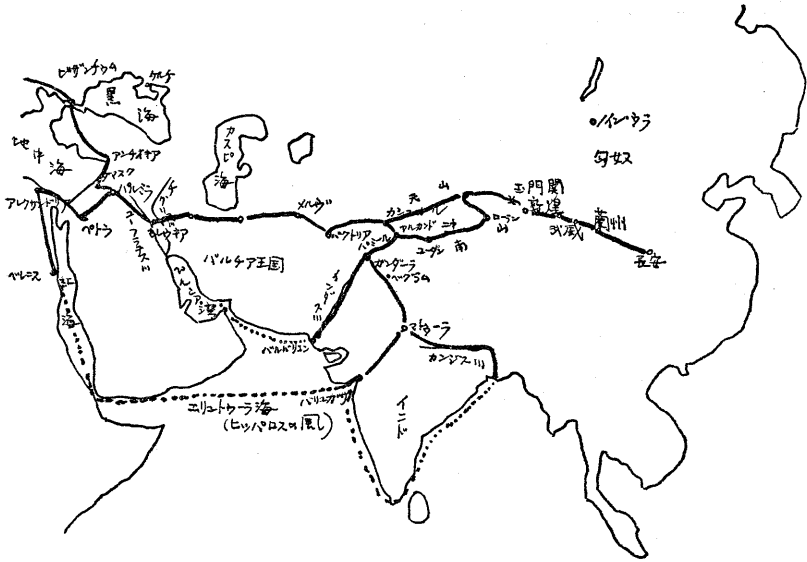
ギリシヤ式仏教芸術として知られるこの彫刻芸術には大変濃厚なヘレニズム様式が認められることで有名ですが、それはもはや

ギリシヤ的というよりは帝政時代のローマ彫刻に通じたローマの工人の手になるものと考えられています(図版①参照)。かれらは海路インドに来、インダス川を遡行してガンダーラの地に入ったものでしょう。かれらの渡米を招いたのは勿論この地の人々の厚い仏教への帰依がもたらす信仰心であったことは確かですが、決して安くはなかったであろうかれらへの報酬をふんだんに賄えるほどに人々が富裕であったからです。ガンダーラに近いベグラムの遺跡で発掘された彩絵のあるローマングラスは、おそらくアレクサンドリアで製造されたもので海路運ばれてきたものでしょう

▲ 図 版 ②



▼図版③



(図版②)。

パルミユラはこのような東西交易路の繁栄に乘じ、小国であったにもかかわらず、パルチアとローマの間において、その二つの勢力の緩衝地帯として位置を利用して、強大化していったのです。パルミユラに発掘された絹はこの海上ルートを使ってパルミユラに達したことも考えられます。

ここで目を東方に転じ、絹が中国を出て西漸する道をたどってみましよう(図版③参照)。

漢唐の首都、長安(今の西安)から蘭州を経て敦煌までの道は主に南山(祁連)山脈の北麓のオアシスをつないでいる、いわゆる河西回廊の道がとられました。その道の情景はNHK番組の「シルク・ロード」により放映されています。敦煌を出て、玉門関あるいは陽関を過ぎるとタリム盆地の大半を埋めるタクラマカン砂漠が広がっています。その北方に天山山脈が連り、パミール高原にまでまたがっています。天山山脈の南と北にそって二つの道がひらかれ、前者を天山南路、後者を天山北路といっています。またタクラマカン砂漠の南のオアシスを東西に結ぶ道があり、これを西域南道と呼んでいます。この三つの道のことは魚拳の『魏略』にも記され、隋代裴矩の編んだ『西域図記』の序文(『隋書』卷六十七『裴矩伝所引』)に整理されて記述されています。

これらの地域は現在の新疆省ウイグル自治区にふくまれていません。

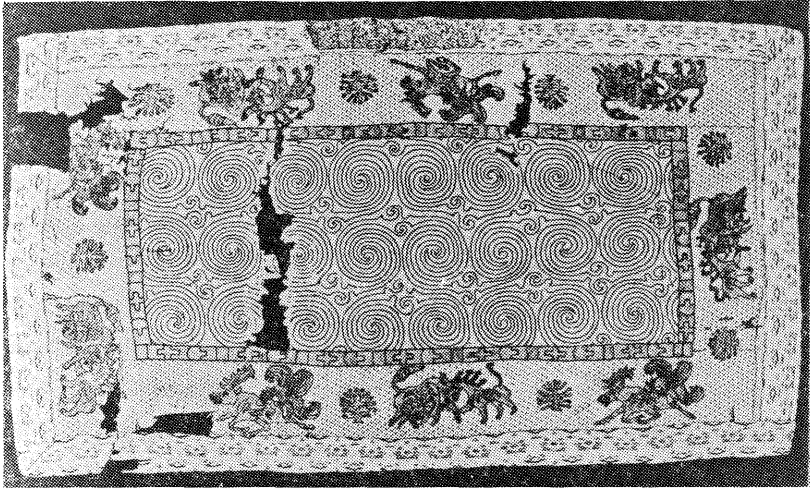
この道は先史時代すでに、「玉の道」としてひらかれていました。新疆のコータンから産出される軟玉が中国にもたらされる道とアフガニスタンのファイサバードで産出されるラピスラズリが西方に運ばれる道とがあり、この道を一貫して通したのが「絹の道」であるのです。絹の道 *Silk Strasse* という言葉をはじめ使ったのは、ドイツの地理学者フリードリッヒ・リヒトホーフェンで、その後、スウェーデンの探検家スウェン・ヘディンやイギリスの探検家オーレル・スタインといった人々や、またわが国の東本願寺の大谷光瑞師をリーダーとした大谷探検隊などによって、これに沿う地域が地理学的にまた考古学的に調査され、文献研究と相まって、その実態が明らかにされてきたのです。スタン卿により極東アジア *Innermost Asia* と呼ばれたそこは、広大なタクラマカン砂漠や険峻なパミール高原を包み込んだ文字通りの内陸アジアであり乾燥アジアです。

長安より敦煌、さらにそれにつづく新疆三道はオアシスに営まれる都市を結ぶもので、その間には砂漠が横たわり、都市はそれぞれ孤立しています。日常の食物はオアシスの緑地を耕作して自給をはかりますが、羊・馬などは遊牧民に求めることになりま

す。また交通の要衝になる大きな都市では商人が住み、地域間の中継貿易を荷い、ラクダの隊商を編成します。この隊商が草原や砂漠を通るときには、そこを支配している遊牧民の了承と保護を要請しなければならず、そのため遊牧民は発言力を強め、月氏、匈奴、鮮卑、柔然、エフタル、突厥、回乾（ウイグル）、蒙古などの北方遊牧民は「絹の道」を常に制圧しようとする、オアシス都市やオアシスの商人たちから、保護の代償として食料や装身具や絹織物を買納させたのです。

匈奴は蒙古高原に根拠をもつ遊牧騎馬民族で、前三世紀の終りごろ冒頓単于（ボクトツゼンウ）が出て、前漢帝国に非常な脅威をあたえたばかりでなく、甘粛回廊地帯にいた遊牧民月氏を西に追いはらい、東胡を従えて、全蒙古を支配下において遊牧民の大帝国を築いたのです。前漢高祖は頻繁なその侵入に苦しみ、宮廷の侍女を公主とならせて、単于に与え、また年々絮（きぬのまわた）、繒（きぬ）、酒、米などを送ったことが『史記』匈奴伝にみえています。

文帝の時（前一七六）、冒頓単于は漢に書状を送り、西は月氏を降し、西域の楼蘭、烏孫、呼揭および近くの二十六国を平定したことを述べ、駱駝一、騎馬二、車を引く四頭の馬二組をもって漢との和親を申し入れてきました。文帝はこれを承諾して、繡袷綺



衣（刺繻の絹布と、綺つまり平地綾が袷仕立てになった衣、パルミユラの墓からも同様のものが出ています）、繻袷長襦（これはよく分りませんが刺繻の絹が使われた袷仕立の長襦袢のことでしょう）、錦の袷と袍（上着）を各々一、比余（くし）、黄金飾具帯一、黄金の胫靴（帯鉤）一、繻十四、錦三十四、赤い締（あつぎぬ）と緑の絹を各々四十四匹を贈っています。

この後、匈奴は漢に馬を、漢は匈奴に帛（絹織物）、糸（絹糸）、絮（まわた）、金、食料などを毎年一定の数量で送り、また辺境の関市で絹と馬を交易するいわゆる『絹馬貿易』が確立しました。匈奴の漢の絹織物に対する要求は相当のもので、中でも最も刺繻を好み、次いで錦を愛好したようです。前漢の賈誼はその著『新書』匈奴編に「家長以上は必ず刺繻のある絹織物をまとい、若いものは必ず文様のある錦をまとう」と書いています。

匈奴は漢の朝廷から多量の絹織物、食料を和平の代償としてうけとり、また関市で、貿易を行いました。他面、騎馬戦術を使って略奪的な行動も少くはなかったのです。略奪した品物はさらに転売することによって、巨利を博し、匈奴をさらに強くしたのですが、この関係は国力が盛んな時には巧くいきますが、国力が衰えると、急速に瓦解します。やがて匈奴は南北の二部にわかれ、後漢の永興元年（一五三）以来、北匈奴は中国の文献にみえ

なくなりします。そこで四世紀に突如ヨーロッパを襲ったフン族は北匈奴の後裔にあたるという説があります。

モンゴル人民共和国の首都ウランバートルの北一三〇キロメートルにあるノイン・ウラ古墳群は北匈奴の王族クラススの墓を含むとされていますが、これが一九二四年ロシアの、P・K・コズロフの手によって発掘調査されました。木槨・木棺ともに漢帝国の古墳と同じ形式であり、容器、土器、木器、装身具など現地あるいは北方産のものほかに、鏡、銅器、漆器、玉、車馬具など明らかに漢の作品であるものが多数含まれていました。漆器の耳杯には「建平五年（前二）五月……」の銘があり、これによって、この墓の年代がほぼ決められています。

織物には毛織物と絹織物があります。絹織物には錦、綺、紗、羅、平絹、刺繍など多様な種類がみられ、すべて漢の作品とみなされます。毛織物では第六号墓の墓室を飾っていたカーペットが注目されます（図版④）。この縁飾りの部分にヤクと有角のライオン、グリフォンとトナカイの闘争図がアプリーケされています。この動物闘争図はペルシアの意匠にもあらわれてきますが、源流はスキタイ系の文化に求められるでしょう。このフェルトの毛氈のまわりに漢の錦が縫いつけられていることにも注目されます。何れも極めて豪華なものです。

漢代の絹織物はシベリアのバイカル湖の南のミヌシンスク近郊のオグラクティの古墳やキルギス共和国のタラス近郊のケンコール古墓、またはるか西方のクリミア半島のケルチのクルガン（高塚古墳）など北方ユーラシアにひろく発見されています。これらはいずれも匈奴によって運ばれたものといわれます。こうしてみると、中国の絹の伝播はひとつ、絹の道を行くばかりでなく、夥しい量の絹を所有した匈奴がユーラシアを騎馬で疾駆することによって果されたといえます。しかしバルミユラ絹の場合は純粹に商業的な行為でもたらされたものであり、平和的手段によったものです。

（山脇女子短期大学）

